

40年ぶりに野焼きを復活 ススキ草原の再生を目指す

編集部



まだ8月末だというのに、山のイタヤカエデはすでに紅葉が始まっていた。ススキの原が一面に広がり、穂が高原の風に揺れている。オミナエシの黄色い花も草原のあちこちに咲いている。

群馬県みなかみ町藤原にある上ノ原は、都会の猛暑をよそに秋の気配をただよわせていた。上越新幹線の上毛高原駅から車で約1時間。藤原は群馬県最北端の山里だ。利根川の源流域にあつて上越国境に近いこの土地は、冬の積雪が3メートルを超えることもある豪雪地帯。植生的には日本海型のブナ帯に属している。

上ノ原は、そんな藤原の、最後の集落の少し上にある。標高は千メートルを超す。面積約21ヘクタール。半分がススキ草原で、残りがミズナラ林だ。

ところでこの上ノ原、かつては200ヘクタールにおよぶ広大な茅場だったという。屋根を葺く茅（ススキ）を採るため、藤原地区の人たちが共同で利用する「入会地」として維持されてきた。ところが60年代、上ノ原の大部分が売却され、ゴルフ場などに開発されてしまう。

その時わずかに残った上ノ原の21ヘクタールを管理するのが、利根川下流域の都市住民や地元の有志者からなる市民団体、森林塾青水だ。03年4月、土地の所有者であるみなかみ町から土地を借り受けた。「入会の森」と名付け、町や地元の人たちが「入り合つて」、ススキ草原とミズナラ林の保全と再生に取り組んでいる。その活動の一端を紹介する。

◆ 富栄養化を抑える

ススキ草原は、利用せずに放置すると樹木が侵入して「森林化」が進む。上ノ原も同じだった。茅葺きの用途も途絶え、かつての茅場はほとんど利用されることなく放



っておかれたため、森林状態の場所が目立っていた。

「20分の1にまで減ってしまった上ノ原を、かつてのような茅場に再生できないものだろうか」

塾の代表・清水英毅さんらは、ススキ草原の再生を決意した。そのためには、ススキ草原の現状把握が欠かせない。入会地として、藤原の人たちは上ノ原をどんなふうにご利用し管理してきたのだろうか。茅場利用の経験と知恵も知る必要があった。

塾のメンバーは03年、上ノ原の現況調査と地元の人たちの聞き取りを始める。ススキ草原では、調査区画を設けて森林化の様子を調べた。ススキのバイオマスも計測した。ヒアリングは、宿泊場所の民宿へ古者たちに来てもらって話を聞いた。

調査で、タニウツギやシラカバを中心に草原の森林化が進んでいることが確認された。これを止めるには、侵入樹木の除伐と同時に、草原の「富栄養化」を抑える作業が大事だとわかった。基本はやはり、秋にススキを刈り取って有機物を外へ持ち出すこと。そして、「野焼き」である。

◆雪間を焼く

かつて上ノ原では、春になると野焼きが行われていた。「雪間を焼く」といって、雪がまだらにとけたところに火を放ち、ススキを焼く雪国ならではの手法だ。しかし、茅場の維持を目的とした野焼きは、65年ごろを最後に途絶えてしまう。

「火入れするといひ茅ができる」という古老のアドバイスもあり、清水さんらは04年早春、地元藤原地区やみなかみ町の協力を得て、40年ぶりに野焼きを復活した。

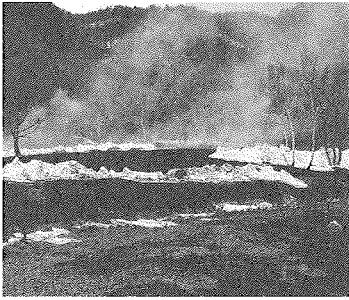
その年、4月18日午前10時45分。天気晴れ、無風。絶好の野焼き日和だった。多くの人が見守る中、藤原地区の野焼き経験者らが斜面上部に立ち、火のついた棒で草原に炎を移すと、炎はゆっくり斜面を下り、枯れたススキがぱちぱち音を立てて燃えていった。開始から約1時間、煙もおさまり、雪間には黒い地面が残った。

地面からは間もなく芽が吹き出し、焼かれた大地はこれまで以上に鮮やかな緑で覆われた。有機物を焼くことで日光が地表に届くように

なり、オミナエシなど

草原の植物が増える可能性が期待

できる。実際、上ノ原の近くに住



40年ぶりに行われた野焼き。残雪が防火帯になっている

む雲越幸子さんは今年、「ずいぶんオミナエシが増えたねえ」と驚いていた。野焼きはその後も継続され、早春の上ノ原の静かな風物詩となりつつある。

◆増えるパートナー

ススキ草原の維持には、春の野焼きと同様、秋の茅刈りも重要だ。

ススキは10月の末、穂の散る頃が刈り時。地元の茅刈り経験者の指導を受けて、塾メンバーも上ノ原の茅刈りをやっている。しかし、刈ったススキの利用先がないのが問題だった。そんなとき、近くの中之条町で重要文化財の修復などを手がける町田工業という会社に出合う。「茅が足りない」という。

現在では、上ノ原のススキは、まだ一部でしかないが、町田工業に買い取られて、重要文化財の屋根の補修に使われたりしている。茅刈りの作業は、塾メンバーでは心許ないので、ほとんどが地元の経験者が引き受けている。単価は安い、何よりも利用の循環が生まれたのが大きな成果だ。

ススキ草原は、里山の二次林と同じように人が利用し管理することではじめて維持できる生態系だ。今年の野焼きに参加した岩手大学の山本信次さんは、塾のニュースレターへの寄稿で次のように書いている。

「明治17年の原野面積は1320万畝と言われています。この当時の『林野』面積も今とあまり変わらない2500万畝でしたので、『林野』の半分は『野』だったこ

とになります。国土面積から考えれば3分の1が原野・草地だったということになります」

ところが現在、日本の草原面積は国土のたった1%程度。今や草原は、里山の雑木林以上に貴重な生態系になってしまった。よく指摘されるように、多くの草原性のチヨウや秋の七草など、かつてはふつうに見られた動植物が生息地を奪われ減少している。草原の再生は、日本全体の課題であると言ってもいい。

森林塾青水は04年、環境省などによる「日本の里地里山30―保全活動コンテスト」に選ばれた。しかし代表の清水さんは、「活動は始まったばかり。今年はガイドマップも作った。でもフィールドの生き物調査など不十分な仕事がたくさん残っている。地元との協力関係はずいぶん密になってきたが、他団体との協力など、上ノ原に合うパートナーをもっと増やしたい」と語る。そして、今後の活動の柱として次のような点を挙げた。

- ①ススキ草原としての生物多様性の回復
- ②ススキの活用方法の模索(文化財修復用、肥料化、バイオマスなど新しい用途)
- ③地元、行政、都市住民が「入り合って」草原を守る「現代版入会」の仕組みづくり

上ノ原にはかつて、キキヨウも咲いていたという。ぜひともキキヨウの花咲く草原の再生を期待したい。

(森林塾青水 <http://www.commoni.net>)